

君は、旧理学部一号館を知っているか

破壊の危機に瀕する被爆建物保存のために

文学部研究生 ◆ 今 正 秀

忘れ去られゆくキャンパスで

広島市にある広島大学東千田キャンパス正門をくぐると、左右に、生きた化石といわれるメタセコイヤの並木を配したメイン・ロード「森戸」道路があり、その正面つきあたり茶褐色のタイル張り建物がある。

一九三一年に広島文理科大学本館として建設され、敗戦後の教育改革・学制改革によって広島大学が誕生して以後は理学部の校舎として、同学部が移転する一九九一年まで六十年の長きにわたって広島大学の学術の中核としての機能を果たしてきた建物である。

この旧理学部一号館は現在閉鎖・放置されており、東千田町キャンパスの跡地利用問題の動向次第では破壊されかねない。以下では、この建物が幾層もの意味で歴史の生き証人であることを確認し、その保存についての私見を述べたい。

被爆建物 — 人類の蛮行の生き証人 —

一九四五年八月六日、人類史上最初の核爆弾が広島市の上空で炸裂。広島文理科大学校舎も被爆した。同校舎では窓ガラスが破壊・飛散し、内部の書棚・机なども転倒したが、鉄筋コンクリート造であったため倒壊は免れ



撮影／経済学部 滝本勇紀

た。しかし、同一敷地内に軒をならべていた広島高等師範学校などの木造建物から発生した火災の炎が、ガラスがなくなった窓から次々に飛来し、内部は原形をとどめないまでに焼き尽くされた。

核爆弾は、続いて八月九日長崎に投下されたが、以後、直接に人間、あるいは人間が生活する都市を対象に投下されたことはない。従って、広島・長崎に残る被爆建物は、核爆弾の惨禍の、そしてそれをもたらした人類の蛮行の、物言わぬ唯一の生き証人なのである。

そのこの持つ意味は、人類史という大きな枠組みの中で考えられなければならない。考古学者の佐原真氏によれば、人類史上において戦争が発生したのは人類が食料生産を開始して以後、すなわちどう遡っても一万年前以上には遡らず、それは四五〇万年になんなんとする人類の歴史においてはごく最近のことに過ぎないという（「ヒトはいつ戦い始めたか」〔国立歴史民俗博物館「歴史博」七一〕）。

例えるならば、四五〇歳を走ってきた人類は最後の一歩のところで戦争を始め、さらに最後の五歩で最初の核爆弾を開発・使用したことになる。人類史上ではごく最近発生したはずの戦争がおそるべき脅威に成長したこと、このままであればそれはどこへ行き着くのか、被爆建物はそれを無言のうちに物語っている。

こうした人類史の意味を有する建物を、経済効率その他の目先の利益を優先させるために、安易に破壊してしまっているのだから。

広島大学の原点

— 学術的伝統の生き証人 —

旧理学部一号館が、広島文理科大学から広島大学へとつながる学術的伝統を象徴する建物であることは、多言を要しまい。敗戦後早くも十月頃には、理科系の一部で実験再開をはかる研究室があったというし、文理科大学は正式には翌四十六年一月に授業を再開、まもなく東千田町キャンパスに復帰している。敗戦後の混乱に加えて原爆による傷を負った広島で、若い学徒の希望に満ちた研究生生活が開かれたのである。

広島大学に学ぶものは、広島大学の原点がそこにあることを忘れてはならない。それは、「被爆地広島で学ぶ」ことの意味を自らに問いかけ続けることであり、学問を通じて平和への道を模索することにつながる。広島大学は、そこで学ぶものが積極的に意図するならば、世界の他のどの大学も有しない特別な意義を持った大学なのであり、その象徴が、かの旧理学部一号館なのである。

被爆建物は破壊と惨害の象徴である一方、その後も活用され続けた結果、そこからの再々、微力ながら私も末端に加わろう。とにかく、保存の声を高めることである。

未来の生存に向けての行動を

以上に述べてきたことに対しては、「老朽化した建物を残せ」というのは後ろ向きで発想に過ぎない」との批判が予想される。しかし、自らの原点を忘れた、あるいは見定めようとしない人間に、進むべき前途が見えるであろうか。

その意味で、旧理学部一号館は、人類の生存そのものを否定する核爆弾の洗礼を受けた人類史上の核時代の原点であり、日本の戦後の原点、広島大学の原点、そして平和の原点なのである。それを見定めることは、確たる未来への原点を自らの内に定めることである。そのためにも、さまざまな原点を象徴する旧理学部一号館を、戦後五十年の今年、未来に向かう者の手で残そうではないか。

プロフィール

- ◆一九六三年三月生まれ
- ◆一九八一年四月文学部史学科国史学専攻入学
- ◆一九九二年三月文学研究科博士課程後期国史学専攻単位取得退学
- ◆日本学術振興会特別研究員を経て、現在文学部研究生
- ◆専門 平安時代を中心とする日本古代史

- ◆趣味 演劇 鑑賞



生と復興の象徴ともなり、それを成し遂げた人々の営為の象徴ともなった（その意味では、原爆ドームは破壊だけを象徴するものといえる）。広島大学の原点、その学術の再生と復興の象徴を、無惨にも瓦礫と化してしまっているのだから。

戦前広島市の都市文化の象徴 — 軍都の都市生活の生き証人 —

文理科大学本館が建設された一九三一年前後、広島市は都市計画を策定し、数年ならずして建設ラッシュが到来。一九四〇年頃には、戦況の悪化によってそれも終息を余儀なくされたが、この十年程の間に建てられた鉄筋コンクリート造の建物が被爆後も残存したのである。

建築学の石丸紀興氏は、それは近代的都市への移行を始めた広島市がその進展の芽を摘みとられたことを意味し、建物はそうした社会的状況を反映しているとされる（一九九五年七月二十五日平和文化市民講座での講演「被爆建物あれこれ」による）。

一九三一年前後といえは、日本が内には労働者・農民を犠牲にしつつ、外にはソシヤル・ダンピングの非難を受けながらの世界市場進出と大陸への武力侵略によって、世界恐慌の嵐から脱しようともがいていた時期である。そうした状況が、日清戦争以来の大陸侵略の出発地軍都広島にどのような影響を与えたのかは、今後明らかにされなければならない。

ところで、石丸氏によれば、近年の被爆建物研究の進展により、被爆建物の設計者が判明することで構造上・意匠上の異同が明らかになったり、全国の日本銀行支店建物を比較することで、広島の場合とくに装飾性がおさ

えられていること、それは一般に装飾性に乏しく面白くないといわれる戦前の広島市の建物に共通の特徴であるが、軍都であるが故に意図的になされた可能性が高いことなど、新たな知見が加えられているという。

こうしたことを踏まえれば、戦前の建物＝被爆建物は、当時の広島市の都市文化の一端を示す貴重な史料なのであり、その意味では、旧理学部一号館は、単に広島大学にとって貴重であるばかりでなく、広島市民にとっても歴史的遺産なのである。

保存に向けて

すでに旧理学部一号館を含め、被爆建物の保存を求める声は、市民のなかからあがっている。以下では、早急に考えなければならぬ点を三つだけ指摘したい。

まず、初めから「一部保存」を考えないことである。それが全面保存への展望が開けないなかでの、祈りにも似た悲痛な声であることは承知しているが、「一部保存」という語は、ほとんどの場合、残る大部分の破壊という事実を隠蔽する、限りなく詭弁に近い語であることを認識しなければならない。まして、「モニメント」としての保存」などにいたっては、何をか言わんやである。その具体的事例としての広島赤十字病院の窓ガラス。あれこそ、骸をさらしているだけではないか。

仮に一部保存するにしても、正面および側面の外壁は全面的に残すべきである。現にそうした保存を行っている建物もある（例えば広島市郷土資料館）。それならば新しい建物との共存も可能であろう。

次に、建物の保存を主張することと密接に関連するが、有効な利用法を提示することである。この建物が学術研究と教育の場であっ

たことからすれば、やはりそうした利用こそもつともふさわしいと考える。

例えば、「戦争と平和に関する国際的・総合的研究機関」を設けることはいかがであろうか。戦争と平和に関して、内外あらゆる分野の研究者が集う研究機関である。そうした研究機関が広島に存在し、そこでの研究成果が研究者のみならず市民に、そして世界に伝えられることは、平和の発信地広島にもつともふさわしい。

第三点は、保存のための有効な運動を、広島大学関係者が中心となって、早急に展開することである。移転経費を土地売却費で賄うという方針の存在が、保存の声を内部からあげにくくしてきたというが、それは、かの建物の有する歴史的意義についての認識不足によると批判されてもやむを得まい。

すでにそうした集まりも存在しているが、その活動は、いまだ学内にさえ十分に浸透しているとはいえない。より積極的に、現役学生・院生はもとより、卒業生にも保存の必要性を呼びかけ、市民向けアピールとして新聞広告を出し、保存を求める署名を集め、せめてもの一助にでもと募金を募るなどのことのできないものか。

「統合移転」を機に、同窓会を一本化しようとの動きもあるが、同窓会の「統合」記念事業として取り組めないものか。「統合移転」が完了し、かつての学舎のほとんどは姿を消していく。誰もが足を運んだ東千田町キャンパスの象徴的建物を保存することは、そこで学んだ大勢の学徒の生の証を残すことでもある。

一九九七年度に予定されている東千田町キャンパス跡地での緑化フェア開催に先だって、建物の破壊は進められるであろうから、時間は限られている。実働部隊が必要だといふな